

企業名： 永大産業（7822）

レポート名： EIDAI REPORT 2021-2022

1. この会社が目指す姿が理解できるか

永大産業は「木」を用いた建築を行い、人々の生活をよりよくすることを目標としている。しかし現在、森林伐採が進み、世界から木が失われている。また、それらにより地球温暖化が進行していて早急な対処が必要とされている。そのため、この会社は持続可能な「木」を無駄なく使い、それを循環させることで環境に配慮している。このように、永大産業は地球と共生しながら人々や社会に貢献していこうとしていることが理解できる。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

私的には、永大産業の強みは取り扱い項目の多さゆえに住宅内空間をトータルで提案できることや製品材料となるパーティクルボードを自社で製造しているところにあると考えている。しかし、EIDAI REPORT 2021-2022にはそのことが強調されているようには見受けられない。そもそも、この統合報告書は企業の軌跡や実績の開示に重きを置いたものであると考えられる。これらは確かにステークホルダーに対して提供すべき情報ではあるが、この情報開示はこの企業独自の強みをアピールする点では効果的な方法ではないと考える。だが、この会社の競争優位性を環境への配慮という間接的な価値想像への営みとすると、パーティクルボードの積極的利用促進している点や、『ESGの取り組み』や『SDGsハイライト』の項目から環境保全の試みを見受けられるため、この会社の強みと見ることができる。しかし、全体的に見るとこの会社の競争優位性はあまり理解できなかった。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

この会社の競争優位性を環境保全への取り組みを積極的に行う企業であることだとすると、その持続性はあるように見える。環境負荷に対するマテリアルバランスや産業廃棄物削減の取り組みの開示から、この企業が実際に環境保全に貢献していることがわかる。木という環境問題に大きく関わるものを扱う産業で、環境保全を積極的に取り組む企業は、企業の実績を大事にする日本では特に高く評価され、それが実績につながることでステークホルダーに還元される。この構造により、この企業はより積極的に環境保全の営みを進めるだろう。そのため、この競争優位性に持続性があると考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

この報告書では、現在インドネシア市場に着目していると述べられていた。経済成長と人口増加が見込まれているが、「木」を使った賃貸や建築の分野の飽和は起きていないと考え

られるこの市場への注目は良いと考える。この着眼点を持って大胆に事業展開を行う社長の手腕は見事だと思った。そのため、この社長のもとで働くことは自身の成長につながると考えた。しかし、この報告書に人材育成に関する言及は全くなく、社員の実際の声も反映されていない。そのため、実際の社内の様子はブラックボックスであり、環境次第では自身の価値向上は期待できないかもしれないと考えた。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

自社の強みを特筆して述べることで競争優位性と持続性を強化することができると考えられる。また、匿名での社員の満足度調査の結果や離職率を実際に示し、そこから自社の見解とそれの対策をアピールすることでブラックボックスである社内環境を透明化し、人材の登用がしやすくなると考える。サクセッションプランの開示も内部での人材育成の実効性を示せるため、見えざる資産である将来世代の関心を引くことができる。これらの要素をこの報告書に示すと良いと考えた。